大阪大学における日独6大学連合 HeKKSaGOn 学長会議の開催：第2期にむけて

海外交流

石　川　真由美*

The 6th Presidents Conference of the German-Japanese University Alliance (HeKKSaGOn) at Osaka University: Challenges and Opportunities for the Second Cycle

Key Words：University consortium, Germany, Japan, research cooperation, mobility

はじめに

日独6大学ネットワーク（HeKKSaGOn（ヘキサゴン））の第6回総会・学長会議は、2018年4月12日、全体会議におけるシンボリック・オブジェクトの点灯式をもって幕を開けました。この「シンボル」は、HeKKSaGOnを表す六角形の台座に、加盟6大学の学長の手によって校章をデザインした6個のクリスタル球が一つずつ納められ、六角形が完成した瞬間に台座全体が光り輝き、音楽が流れるというものでした。点灯式は学内で企画され、オブジェクトの制作も関係者自らが手がけたもので、大阪大学のイノベーション力と「おもしろいもの好き」な大阪人スピリットが見事に合体した会議のスタートとなりました。

これに続く2日間、「次の段階の交流による社会的なインパクトと可視性の向上」というテーマの下、全体会議や学長会議、研究ワーキング・グループ（WG）のワークショップ、シンポジウム、学生のワークショップや大学院生の研究発表会など、多彩で活発な活動が展開されました。参加者は、加盟校である日独6大学の学長・副学長、学生、研究者、職員等や来賓を含め、のべ200名近くを数えました。

HeKKSaGOnは日独間の持続的な学術協力の強化を通し、広く社会と人類の幸福と繁栄に寄与することを目的として、2010年にドイツのハイデルベルクにおいて発足しました。メンバーは、ハイデルベルク大学、京都大学、カールスルーエ工科大学、東北大学、ゲッティンゲン大学、大阪大学という日本・ドイツ2カ国の6研究大学で、HeKKSaGOnという名称は加盟大学の所在都市名の頭文字に由来します。今回、大阪大学で開催された第6回総会をもって全加盟校による会議開催が一巡するため、大阪会議には第1期目の総括を行うと同時に、第2期に向けてコンソーシアムの将来を話し合い、活動方針を明確化する節目の会合という重要な位置づけがありました。

6学長によるシンボリック・オブジェクト点灯式

私は、会議を開催するにあたって大阪大学に設置された準備委員会委員、実施ワーキンググループ主査として、HeKKSaGOnの活動に深く関わる機会を得ました。本稿では、この大阪会議の成果、HeKKSaGOnの研究WGとその実績等、このコンソーシアムの活動の一端をご紹介します。

「ネットワーク」から「アライアンス」へ

HeKKSaGOnはトップダウンとボトムアップの双方の活動を両輪とし、両者に牽引されています。トップダウンとは、学長が果たす役割が非常に重要

* Mayumi ISHIKAWA
1961年3月生まれ
現在、大阪大学　グローバルイニシアティブ・センター　国際企画部門　教授
人間科学博士（大阪大学）　人類学
TEL：06-6879-4975
E-mail：ishikawa@iai.osaka-u.ac.jp

であることです。まず、会議の初日には、全6学長が会議テーマに沿った講演を行うことが慣例で、今回西尾章治郎総長はホスト校の学長として、第1期活動の総括を行った上で、第2期に向けて「共創」による連携強化を訴えました。さらに、HeKKSaGOnの将来の計画や方針は、6大学学長会議における対面の議論を経て正式決定されます。今回の大阪会議では、2日目の2時間半の議論を経て「Statement and Future Perspective」という声明文が採択され、最後の全体会議でこの文書に学長全員が署名しました。

この文書の精神は、第1期の成功をふまえて、HeKKSaGOnを日独大学「ネットワーク」から戦略的な6大学「連合（アライアンス）」へと再定義したことによく現れています。さらに、今後も2カ国6大学の枠組みを堅持すること、機関メンバーを6大学に限定する一方で、研究ワーキング・グループ（WG）を活性化するために加盟大学以外からの個人参加の道を開くこと、若手研究者をWGの主たる担い手とすること等が確認されました。また、第2期の最初の会合となる次回2019年のハイデルベルク大学において、次期の戦略「Future Strategy」を作成することが約束され、そのなかに研究WGのガイドラインについても盛り込まれることとなりました。

さらに、参加大学間で大学経営やガバナンスの経験も共有し、世界の国際交流の模範となること、インターンシップやサマー／ウィンター・スクールのような学生のための教育活動をさらに充実・強化する意欲も示されました。

研究WGの成果と将来

一方、HeKKSaGOnのまさに根幹とも言うべき活動がボトムアップの研究交流で、現在、8つのテーマ別ワーキング・グループ（WG）によって推進されています。正式名称は省略しますが、大阪会議においては「生命・自然科学フュージョン」「コーディネーション化学」「社会・人文科学」「ダイナミック・イメージング」「ロボティクス」「インターフェイス数学」「データ科学」の7分野においてワークショップが開催され、全体会議での活動報告が行われました。さらに、「再生エネルギー」分野の研究者が大阪で初会合をもち、正式WG設立にむけて活動中です。なお、今回は「神経科学」WGはチェアの交代により休会で活動報告のみ行われ、「災害」WGは関係者の合意で終了となりました。

参加学生たち

大阪会議に先立って、各WGチェアからの報告に基づいて第1期の実績をまとめたところ、合わせて研究プロジェクト25件、ワークショップ・シンポジウム等の研究集会が44件、ウィンターおよびサマー・スクールが2012年の初回から数えてすでに7回、研究成果としての論文が58本、人的交流（モビリティ）のべ200人という報告がありました。このうち44の研究集会については、25回は日本、18回はドイツで開催され、600人近い学生を含めて1800人以上の参加者がありました。出版実績の58論文のうち3分の1がいわゆる「トップ10%」の学術雑誌に掲載され、刊行数は近年になって着実に増加傾向にあります。また、ここで示す人的交流データはあくまでもWGの活動としての実績であり、それ以外の2大学間の交流やWG以外の分野での人的交流を含まないため、実際はさらに多数のモビリティ実績があったと考えられます。このように、HeKKSaGOnは第1期から着実な成果を上げてきました。

WGの活動報告を見ると、研究交流や人的交流、学生の共同指導、共同学位プログラムの立ち上げなど、重点や方向性は様々です。しかし、多くの研究WGに共通するのは、日独を代表する研究大学から成るコンソーシアムとしての性格上、研究を通した教育やそのための人材交流が重視されることです。研究者同士の信頼関係に基づく学生交流と人材育成が、第2期においてもHeKKSaGOnの活動の柱となることは間違いないでしょう。

さらに、前回のカールスルーエ工科大学における会議から、「学生ワークショップ」が始まり、大阪では国連の定める「持続可能な開発目標（SDGs）」をテーマに日独19人の学生が2日間熱心にディスカッションを行い、本会議で成果を発表しました。

研究ワーキング・グループの様子

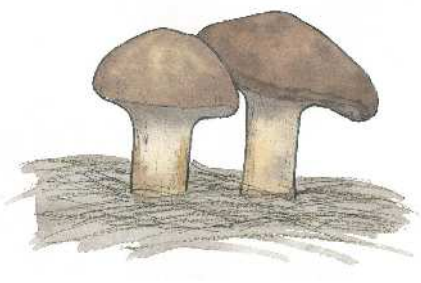
大阪大学の試み

大阪会議の主催にあたっては、大阪大学らしさを前面に出すことも課題となりました。例えば、初日の基調講演では、脳情報通信融合研究センター（CiNet）の柳田敏雄センター長が、大阪大学における最先端の脳科学研究を紹介しました。研究面での多分野融合性に加え、省庁間連携というCiNetのユニークな位置づけについても説明がありました。

HeKKSaGOnを全学的に盛り上げるため、総会の前から様々なイベントが企画されました。例えば、グローバル・ヒストリー（人文）、ダイナミック・イメージング、数学とデータサイエンス合同による3件のプレ・ワークショップが、大阪大学の関係者の尽力もあって開催されました。これらの集会には、企業、国立研究所や文部科学省からのスピーカー参加があり、HeKKSaGOnの目指す、分野やセクターを越えた学術交流の場を提供しました。

また、会議終了後の4月13日の夕食会では、大阪大学の学生2名が司会進行をつとめ、ダンスサークル「祭楽人（まだに）」が踊りを披露するなど、パーティーを大いに盛り上げてくれました。

次期に向けて

振り返ってみると、HeKKSaGOn大阪会議の2日間は非常に濃密な、有意義な時間でした。開催校として、大阪大学から多くの学生や若手研究者が参加できたことが大きな収穫であり、第2期に繋がる力強いスタートの会ともなった大きな理由です。次回のハイデルベルク大学で始まる来期においては、HeKKSaGOnという大学連合のより一層の発展と、大阪大学にとって更なる学びの機会と交流の場となることを大いに期待しています。

本会議開催にあたっては、大阪大学河原源太理事・副学長、ヘキサゴン準備委員会および実施WGメンバー、研究WGメンバー、国際部、科学機器リノベーション工作支援センター、クリエイティブユニットをはじめ、関係者諸氏に厚く御礼申し上げます。